

舞台係奮闘記

実行委員 中尾健志



多少舞台経験があるということから、私は、舞台係を仰せつかりました。最初は気楽に受けていましたが、大会が近付くにつれて、これは大変なことだと気が付きました。

12ステージを演奏時間13～16分、幕間5分で、4時半に最後のステージが終わり、5時半から場所を変えて懇親会、その日のうちに帰る団体が多く、懇親会は7時半終了が絶対条件ということなので、殆ど余裕がないのです。遅れが許されません。

問題は幕間の時間を如何に守るか、人数も楽器もステージごとに大きく変わるのに対応しなければなりません。楽器はほとんど団員の方が運び入れるので、我々は大型楽器の準備と、椅子・譜面台の数と配置をそろえるのが最大の課題です。また楽器の配置や調整にもいろいろの要求条件があります。

私は最初、椅子・譜面台の余ったものは舞台袖に置くことを主張しましたが、それでは舞台の景観を損ねるというので、すべて舞台裏に運びだし、足らないときは舞台裏から運び入れるということになりました。つまりステージごとにそれらの出し入れがあるということです。このような舞台転換を効率的に進めるために、舞台変更の計画を立てるとともに、舞台配置図を拡大して白版に貼り出し、次の舞台のための準備をするようにしました。

大変幸運なことに、宇都宮シルバーアンサンブルを後援しているウエノ楽器の若いスタッフの応援と、作新学院の学生の協力を得ることができました。ウエノ楽器の方たちは楽器に関する専門知識があり、特に大型の楽器の配置・調整をスムーズに進めてくれましたし、若くて体力のある学生たちは、朝のリハーサルから最後の片づけまで疲れ知らずに敏速に動いてくれました。私はといえば、全体がうまくいっているかどうか、落ちがないかと、午前のリハーサルから午後の本番終わりまで、舞台転換中、舞台の上をうろうろしていました。



このような状況ですから、精神的に自分の演奏どころではなく、リハーサル室でのリハーサルにも参加できませんでした。本番は宇都宮の出番が開演のトップであったので、演奏を終えた後は舞台係に専念できました。途中遅れそうになったことが何度ありましたが、何とか持ちこたえて、ほぼ時間通りに演奏を完了することができました。

要求されていた設定と異なる設定になってしまっていて、スタートしてしまってからアッというようなことも2、3度ありましたが、何も文句を言わずに対応してくれた楽団の方々には大変感謝いたします。